

「その言い方は、ちょっと」

色々とお許しを頂いて、かれこれ6年も敦賀教会幼稚園の園長をしています。「園長先生」と呼ばれることにも、良いのか悪いのか随分と慣れてしまって、私立幼稚園協会か何かの集まりに行くと、そこで「園長先生、ちょっと」と言われると、自分のことかと思って振り返ることがあるくらいに自意識が育ってしまいました。まあ、園長の自覚がないよりは、適度な自惚れがあるくらいが丁度良いのかも知れないと思っています。ただ、そんな風に、「園長先生、ちょっと」と言われて、自分のことじゃないのに振り返ってしまうという現象は、これ案外寂しいことなんですよね。何が寂しいかと言うと、「園長先生」って、私の名前じゃないということです。敦賀教会幼稚園の卒園生の方々に、たまにお会いすることがあります。そして、時々こんな会話をします。「あっ、うちの幼稚園に通っておられたんですね」「そうなんですよー、〇〇先生に担任をしてもらって」「そうなんですか、〇〇先生は、今も幼稚園にいて活躍してくれていますよ」「今もお元気なんですか、良かったです」「えっと、ところで在園されていた時の園長先生ってどなただったんですか」「んー、確かその時の園長先生は、男の先生でした」「そうですかー、男の先生でしたかー」。まあ、何が言いたいかと言いますと、園長先生って、いつも園長先生としか呼ばれないから、園長先生の名前が何だったか、誰の記憶にもほとんど残っていないんですね。園長先生以外の先生たちは、だいたい苗字で呼ばれますから、顔と名前がセットで憶えてもらえますけど、園長先生って、極論、性別と眼鏡の有無と髪の毛の状態くらいしか憶えてもらえないようです。だから、きっと、私も、いつか「若い男の人でしたー」という表現で思い出されるんだろうなあ、と。別に、自分の名前を誰かの記憶に刻み付けたいわけではありませんが、でも、ちょっとだけ、寂しい気持ちになるわけです。

話しは変わりますが、「園長先生」という肩書を巡る、こうした状況は、実は歴史学と言語学という考え方においても非常に興味深いものです。私たちは、歴史というものを捉える時に、西暦とか年号とか、そういう数字で区切って考えますが、実は歴史の区切りって「ある言葉が誰を指すか、何を指すかで決まってくる」という、そういう側面もあるですね。たとえば、「日本の首都は？」という質問に対して、「それは江戸に決まってる」と答える人が生きてた時代が、江戸時代ですね。「それは平城京だよ」と答える人が生きてた時代が奈良時代です。同じように、「敦賀教会幼稚園の園長先生って誰ですか？」と聞かれて、「えっと確か大澤先生でした」と答える人は、西暦において「1952年～1965年」を生きただけであり、「あやふやですけど、有岡という名前だったかと」と答える人は、一番新しい時代を生きている人になります。そうやって、「ある言葉が誰を指すか、何を指すか」という基準で、歴史を区切って考えることができる、ということも、あまり役には立ちませんが、トリビアとして、瑣末な豆知識として頭の片隅にあっても良いのかな、と思います。ある言語学者は、「言葉が歴史を作る」とも言っていました。

そんな毒にも薬にもなりそうもない雑学を踏まえつつ、今日の聖書箇所を見ていきたいと思えます。今日の聖書箇所は、簡単にまとめてしまうと「私たちは、イエスを自分の中にお迎えすることで、つまり、真心をもって信じ、受け入れることで、死という絶望を大きく超えて、天に蓄えてある本当の幸いを得ることができるのだ」ということです。だいぶ簡単に表現しましたが、そういうことです。すでにキリスト教信仰を持つ方々は、おそらく特に疑問もなく、この聖書箇所を、私が今表現したように読まれたかたと思います。「人の子の肉を食べ、その血を飲む」という言葉にしても、それが文字通りの意味ではないことを、言うまでもなく理解されているかと思いますが、「永遠の命」というものも、それが不老不死という肉体的な「長生き」ではないことを納得されているかと思いますが、でも、想像力をもって、今回の聖書箇所を初めて聞いた人の気持ちを考えてみます

と、きっとドン引きですよ。え、キリスト教って人の肉を食べるんですか」と。「血を飲むんですか」と。「パンを食べたら永遠に生きるんですか」と。キリスト教信仰を持たない人の気持ちを少しでも考えて、この聖書箇所を読むなら、私は正直に「イエス様は、その言い方は、ちょっと・・・」と、思ってしまいます。「もっと、こうキリスト教初心者慮った言い方ってあるんじゃないでしょうか・・・」と。大きな誤解を与えてしまいますよね、きっと。

かつて、ローマ帝国において、キリスト教が大きな迫害を受けていた時、キリスト教の信仰者たちは逮捕され、拷問されることもありました。衛生環境も医療技術も未熟だった当時、拷問で受けた傷が原因で、手足を失う信仰者もいたと言います。しかし、それでも彼らは信仰を捨てず、大っぴらに礼拝をすることができないから、地下に潜り、隠れた場所で「人の子の肉を食べ、その血を飲む」という聖餐式を伴う礼拝を続けてきました。非常に篤い信仰者たちだったと思います。しかし、果たして、そんなキリスト教の信仰者を見て、周りの人は、どう思ったのでしょうか。「あいつらは、人の肉を食べるらしいぞ」「血を飲むらしいぞ」「確かに言われてみれば、あいつらは手がないし、足もないじゃないか」・・・という、そんな悲劇的なくらいの誤解と偏見が、大迫害の時代にはあったんだそうです。そんな歴史上の経緯を含めて考えてみますと、なおのこと「イエス様、もっと他に言い方あったんじゃないですか」と、正直に思います。

しかし、私たちの歴史を支配される神様は、「食人宗教」というレッテルを貼られたキリスト教を、ローマ帝国の国教となさいました。初めは小さなイスラエルという国の民族宗教に過ぎなかったものを、地球規模の版図を誇る世界宗教に引き上げられたのです。そして、その宣教の歴史の中で、「人の子の肉を食べる」という言葉が何を意味するのか、「血を飲む」という言葉が何を意味するのか、「永遠の命」という言葉が何を意味するのか。非常に多くの人々の間で理解が変わっていききました。それは、つまり歴史が移り変わって行ったということです。「人の子の肉を食べ、血を飲

み、永遠の命を得る」という言葉が、野蛮で荒唐無稽なイメージではなく、「それは神の子・主イエス・キリストを喜んで受け入れることだ」という恵みのイメージに変わりました。この変化は、その後続いていくキリスト教精神に基づいた西洋文化の発展を通して、私たちの歴史を決定づけて行きました。「人の血肉を食らう」という言葉の意味を、「野蛮だ」と理解する旧時代と、「恵みだ」と理解する新時代とに、ある時、決定的に分かれたのです。

そして、私たちも、そんな気はサラサラないと思いますが、この日本において新しい時代を作ろうとしています。それは、どんな時代かと言うと、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」という今回の 54 節の御言葉を、「あ、それって聖餐式で神様の約束と祝福を喜び合うことですよね」と、誰もが当たり前のように理解する、そんな時代です。「えっ、人の血肉を食らうなんて、気持ち悪い」という古い考え方を、この日本社会から追い出して、イエス様の伝えたかった真の福音が行き渡る社会を実現させることこそ、私たちの宣教の使命です。そういう新時代を築くことが、言ってみれば、我々の努力目標なんですよね。

これは、ちょっと突拍子もない話ですが、この敦賀教会を含め、キリスト教の教会は、来る終わりの日に実現する神の国の先取りと言われていています。だから、ある意味、私たちって教会に繋がることで未来を生きているんですよね。あの、ここ、実は未来空間なんです、そして、私たちは教会用語という未来言語を使って礼拝をしているんです。・・・まあ、ちょっと私も言っていて恥ずかしいですが、でも、これは非常に真面目な神学理論であり、信仰理解です。私たちは、この現代の世界の中を生きつつ、でも、教会という神の国の先取りに繋がり、将来実現する「終わりの日」「神の国の到来」を心に思い描いて、今日も、賛美と祈りを捧げ、聖餐式を守るのです。そして、この聖餐式の喜びと恵みを、ちょっとでも良いから、周りに宣べ伝えていくことが、とても大切なんです。

もちろん、その喜びと恵みを宣べ伝えるために、「人の子の血肉を食らって、ハッピーになりなさい」なんてド直球に言っても、響くわけありません。「永遠の命」という表現ですら、もう怪しさ満点です。教会が一人よがりに、教会用語を操ることが正しいとは私は思いません。だから、福音書において、マタイが、ユダヤ人を意識して言葉を選んだように、ルカが異邦人を心に留めて語り口を変えたように、ヨハネが迫害される信仰者を励ます思いで御言葉を紡いだように、私たちが語るべき相手に合わせて、相応しい言葉を選び、相手に益となる言葉を一生懸命に探して参りたいと思います。「ちょっと、その言い方は・・・」と思えるようなイエス様の御言葉が、いつの日か、誰にとっても良き報せとして理解され、聴いてもらえるような、そんな未来が実現するように。そのための宣教の業を、諦めず、希望をもって続けて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。忙しく日々を過ごす中、この特別に取り分けられた聖なる日だけは、心を整えて、あなたに祈り、賛美することが赦され、ありがとうございます。あなたは、この安息日、聖日という恵みの一日を、世界を造られた時から用意され、私たちのために取り分けてくださいました。この、あなたの配慮と慈しみを、私たちは少しでも多くの人に宣べ伝え、ともに祝福に与ることができるよう、これからも励んで参りたいと思います。あなたの御言葉が、誰にとっても福音として理解される、そんな日が来ますように。あなたの福音が誰にとっても幸いであると感じられるように。どうか、そんな未来に向けて、あなたが力強く導いてください。そして、その御業の一端を私たちも担うことができますように。私たちのことを十分に用いてください。今日、執り行われる聖餐式の喜びを、一人でも多くの人に伝えることができますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

10月誕生者の祝福祈祷

聖書：詩編 71 編 14～19 節

わたしは常に待ち望み／繰り返し、あなたを賛美します。 わたしの口は恵みの御業を／御救いを絶えることなく語り／なお、決して語り尽くすことはできません。 しかし主よ、わたしの主よ／わたしは力を奮い起こして進みいで／ひたすら恵みの御業を唱えましょう。 神よ、わたしの若いときから／あなた御自身が常に教えてくださるので／今に至るまでわたしは／驚くべき御業を語り伝えて来ました。 わたしが老いて白髪になっても／神よ、どうか捨て去らないでください。 御腕の業を、力強い御業を／来るべき世代に語り伝えさせてください。 神よ、恵みの御業は高い天に広がっています。あなたはすぐれた御業を行われました。神よ、誰があなたに並びえましょう。

週報に記載されている 10 月誕生者のお名前をお読みします。

神様。

私たちは、この 10 月に誕生日を迎えられる方々を憶えて祈りを合わせております。あなたによって導かれる人の一生は、決して安楽だけはないことを私たちは知っております。この 10 月に誕生日を迎えられるお一人お一人にも、それぞれに苦難の時があったことと思います。あなたの御業は、滞りなく順風が吹き、また逆風も吹き抜けます。しかし、あなたは、愛する者を決してお見捨てになることのない方であることも、私たちは知っています。順風も逆風も、あなたの愛を曇らせることはありません。10 月誕生者の方々を今日に至るまで支え導いてくださり、そして、こうして私たちと相見える機会を与え、掛け替えのない友人にしてくださった幸いを感謝致します。どうか、この方々の上に、あなたの絶えざる恵みが豊かにありますように。いついかなる時も、あなたの御守りと御支えがありますように。心からお祈り致します。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。